

## イージー・ライダーに見る若者の肖像

03K030 久志田 渉

### 1、はじめに

人間には健全かつ秩序的な「正義」と、利己的でどこか儚い「悪」への憧れとが同居しているように思う。時に若者は人生への眼差しが真剣であればあるほど、弱者や敗者への労わりに欠けた「正義」に嫌悪感を覚え、悲しくも直向きな「悪」への憧憬を深めてしまう場合があるだろう。

映画『イージー・ライダー』は、必死に「自由」を求めながらも現実の醜さに直面し、遂には挫折する若者の姿を鮮烈に描いている。彼等は「正義」や「善」の中に潜む不気味なモノを拒みながら、その「正義」によって葬り去られる。この映画が製作されてから40年近い月日を経ても人々の胸を強く揺さぶり続けるのは、不器用かつ無軌道な生き方を貫きながらもどこまでも真っ直ぐに生きる若者の“一瞬の輝き”を刻み付けているからではないだろうか？1960年代アメリカのある青年の悲しくも美しい旅の情景は、現代も尚「自由」を求めて得る事の出来ない若者たちへのメッセージを秘めているように、私は感じる。

今回のレポートでは、『イージー・ライダー』の作品世界を考察する事で、この作品に込められた強いメッセージ性と現代にも通じる「若者像」を探って行きたい。

### 2、作品梗概

『イージー・ライダー』(Easy Rider)

1969年7月14日公開(1時間35分) コロムビア映画

監督 デニス・ホッパー 『ラストムービー』『逃げる天使』

出演 ピーター・フォンダ 『さすらいのカーボーイ』『恐怖の追跡』

デニス・ホッパー 『理由なき反抗』『アメリカの友人』

ジャック・ニコルソン 『カッコウの巣の上で』『愛と追憶の日々』<sup>(1)</sup>

麻薬密売で大金を得た2人の若者、ワイアット(キャプテン・アメリカ ピーター・フォンダ)とビリー(デニス・ホッパー)はニューオーリンズで盛大に開かれるマルディ・グラ(キリスト受難を記念する「聖金曜日」後の「復活祭」第一日目である「聖灰水曜日」直前の日曜・月曜・火曜に実施される「謝肉祭」の最終日を目指す。ニューオーリンズの「マルディ・グラ」はその華麗な仮装舞踏会や街頭パレードなどによって広く知られている<sup>(2)</sup>を目指し、カリフォルニアからアメリカ大陸を横断する気促なツーリングに出発する。長髪に奇抜な服装、そしてドラッグを愛する2人を泊めてくれる宿も無く、野宿を続けながら彼らは1960年代アメリカの現実に直面する。まるで開拓期のような素朴かつ健全な家庭を築く農夫の一家、ヒッチハイカーを送り届け

た先であるヒッピーたちのコミュニオン、名士の息子だが、南部の気風に馴染む事が出来ずドロップアウトした酔いどれ弁護士ジョージ（ジャック・ニコルソン）との出会い。

ジョージと意気投合し、共に旅を続ける2人だったが、アメリカ南部の保守的な人々は、全身で「自由」を象徴する彼らを拒絶し、その存在を危険視する。そして自警団の夜討ちによってジョージは呆気ない最期を迎えてしまう。ジョージの死を引きずるワイアットは、ビリーと共にニューオリンズの高級娼館「青灯亭」に向くが、娼婦マリ、カレンとマルディ・グラに繰り出しても、墓地でLSDを服用し一時の快楽に身を委ねてもその心は晴れない。焚火にあたりながら過ごす野宿の一夜、「フロリダで隠居しよう。俺たちは金持ちじゃないか」と言うビリーに、ワイアットは「俺たちは負けたんだ」と呟く。

翌日、バイクで疾走する2人は追い越したトラックの運転手から銃撃を受け、儚く命を落とす。

### 3、『イージー・ライダー』に見る若者の肖像

映画『イージー・ライダー』は1969年7月に公開され、37万5000ドルの低予算で製作されながら、最終的には約6000万ドル以上の収益を上げ、一大センセーションをアメリカのみならず全世界に巻き起こした作品である。69年度カンヌ映画祭での「新人監督による作品賞」「国際エバンジェリ委員会映画賞」のダブル受賞や第42回アカデミー賞「最優秀脚本賞」（デニス・ホッパー、ピーター・フォンダ、テリー・サザーン）「最優秀助演男優賞」（ジャック・ニコルソン）へのノミネートなど華々しい成果を残しているが<sup>(3)</sup>、特筆すべきは、この作品がそれ以前の映画作品で描かれて来た「ヒーロー像」とはあまりにもかげ離れた主人公たちを描きながら、当時の若者たちから熱狂的な支持を集めた点である。物語の主人公・ワイアットとビリーは、この時代アメリカの若者たちを中心に根付いていた「カウンターカルチャー」（対抗文化）を象徴するような存在である。体制への隷属や親世代のモラルを嫌い、髪を伸ばしヒゲを生やし、ドラッグとフリーセックスに価値を見出す彼等の生き方は、公民権運動の盛り上がりやベトナム戦争の泥沼化などに起因する「アメリカ的正義」の衰退とも絡み合い、盛り上がりを見せていた。しかし、この頃製作された「カウンターカルチャー」の若者を描いた多くの作品が、時代の潮流の表面だけを描き消えて行ったのに対し、『イージー・ライダー』に描かれた若者像にはいつの時代の若者にも通じる普遍性があるように感じる。もし、この作品が無軌道に生きる若者たちの様子を面白おかしく描いただけのモノだったとしたら、これほどまでの支持を集める事は無かっただろう。この章では、作品を具体的に検証しながら、『イージー・ライダー』に描かれた若者像を探ってみたい。

まず注目したいのは、物語の主人公「キャプテン・アメリカ」ことワイアットの人物像である。彼は相棒であるビリーと比較して、魅力的な人物として描かれている。確かにワイアットは、一見するとドラッグに溺れ、あまりにも無軌道かつ利根的な日常を送っていると言えるだろう。しかし、この映画を観る者に伝わってくるのは、彼の物事を真剣に見詰める悲しげな眼差しと、豊かな感受性である。旅の途中で出会った農夫の一家に昼食をご馳走になる一場面、ワイアットは強い尊敬と羨望の思いを込めてこの農夫を見詰める。過酷な労働で

汗を流し、都会への憧れを抱きつつも美しい妻とたくさんの子供たちと健全な家庭を築き上げている農夫に対するワイアットの羨望は、彼の生き方が対照的な物であればあるほど切ない。人間は自分と対照的な存在に対して、強い憧憬と理解を持つように思う。ワイアットは、その生き方が奔放であるからこそ、この農夫の築いた幸福を深く理解出来るのではないだろうか。

同じような眼差しを、ワイアットはヒッチハイカーを送り届けた先である、ヒッピーたちが共同生活を送るコミュニンに対しても向けている。自然の中で若い男女が次作で自給自足の生活を送りながら子供たちを育て、即興劇などの楽しみを通して厳しくはあるが理想に燃えた生活を送っているヒッピーたちに向けるワイアットの悲しみさえ感じさせる視線の原因は、いったい何であろう？物語を通してワイアットやビリーの過去が語られる事は無い。観客たちはピーター・フォンダの現実の姿をワイアットに投影しつつ、同時に自分自身の姿をもワイアットに見付けるだろう。ここに『イージー・ライダー』が多くの若者から共感を集めた要因があるように私は思う。ワイアットという若者は、多くの若者が抱える青春の戸惑いや悲しみの象徴として描かれているのではないだろうか？若者はいつの時代も古臭いモラルや体制に対して嫌悪感を抱き、自分らしい生き方を模索して試行錯誤する。1960年代のアメリカの青年たちは、そうした心の鬱積を享樂的な「カウンターカルチャー」として表現したが、一方では全米に吹き荒れるリベラルな風に乗って、公民権運動やベトナム戦争に起因する反戦運動に身を投じる若者の存在もあった。一見するとあまりにも異なる青春を生きたアメリカの若者たちだが、彼等を行動へ駆り立てたのは共通する思い、つまり自分らしく生きる事が出来ない自分自身へのもどかしさや社会への漠然とした憤りにあると、私は考える。こうした思いを共有し、自我を確立しようともがいている多くの若者たちは、ワイアットの姿に自分たちと同じ悩みを見付け、自分たちの象徴として彼を見詰めたのではないか？『ベルリン、天使の詩』や『ランド・オブ・プレんティ』などの作品で知られる映画監督ヴィム・ヴェンダース（1945年生）は、『イージー・ライダー』について「試写室から出てきたとき、私は、一種異様な感じで、まるで映画のなかまこいるみたいだと思った。（中略）私は（試写室のある）コロムビアの建物の前に立って自分が映画に出ていた人間たちにそっくりなこと、自分もジミ・ヘンドリックスが大好きで、多くのカフェで客扱いしてもらえず、些細なことで留置所に放り込まれた経験がある、といったことを改めて確認した。そのうちこれらの人々も自分に向かって発砲するのかもしれない、と私は思った」<sup>(4)</sup>と記している。それぞれの生き方を求めている若者たちは、それぞれに異なる価値観を持ちながらも銀幕に現れた一人の若者の姿に、必死に生きる自分の姿を重ねたのかもしれない。ワイアットがヒッチハイカーへ「君は何か別の物になりたい？」と問いかけ、「ブタにはなりたくないな」という答えを聞いて眩く、「僕は自分以外の何者にもなりたくない」という台詞は、若者の気持ちをあまりにも巧く集約した言葉のように私には思えた。

この物語にはもう一人、鮮烈な印象を残す若者が登場する。ジャック・ニコルソン扮する南部の青年ジョージ・ハンセンだ。名家に生まれながら、南部の保守的な気風に溶け込めず、酒浸りの毎日を送る若き弁護士をニコルソンは抜群のパーソナリティで表現している。ジョージもまた、人の痛みを自分のモノとして感じ取れるだけの知性を持っているからこそ、「悪」の道へ踏み込んでしまった青年の一人と言えるだろう。しかし、社会から「悪」と規定される生き方をしているジョージが見せる表情や感受性はどれほど豊かだろうか。自分

たちを「正義」だと信じ込んでいる南部の若者や大人たちの、感情が冷え切ってしまった風貌と比較する時、彼の輝きは一層強く感じられる。そして彼の存在もワイアットやビリー同様に、保守的な人々が恐れ、自分たちのモラルを守るために排除しようとする「自由」の象徴に他ならない。ジョージが「出来損ないのお坊ちゃん」で通用するのは、彼が生まれ育った町においてだけであり、一步その外に出て「自由」に歩み始めれば、彼もまた「秩序」の破壊者となってしまう。ワイアットやジョージの無軌道な姿の下に隠された美しさを発見してくれるほど、世の中は甘くない。『イージー・ライダー』は、こうした現実の厳しさからも目を背けていない。この作品は若者の思いを代弁しながらも、彼等の置かれた状況を冷静に見詰めるだけの視野の広さを兼ね備えている。だからこそ、『イージー・ライダー』は自分たちの殻に閉じこもって傷を舐めあうような多くの青春ドラマと一線を画する、幅広い価値観を持つ人々に愛される作品になり得たのではないだろうか？

そして、この作品に観る者の心を強く揺さぶるパワーを与えているのは、登場する若者たちが経験する“青春”の情景を、美しく愛惜を込めて描いている点にもあるだろう。60年代にヒットしたロックやフォークソングをバックに綴られるワイアットとビリーの放浪の旅の風景は、美しく鮮やかな印象を観客に与える。野宿の夜、気のあった仲間と交わす取り留めのない会話、コミュニケーションで出会った2人の女の子との束の間の小旅行、ただ通り過ぎて行っただけの広大なアメリカの風景…。人間に生きる力を与えてくれるのは、こうした何気なく心に刻まれていく一瞬の輝きである。ワイアットとビリーが経験した旅の情景は、私たちそれぞれの胸に刻まれた思い出とも重なり合う。多くの人の胸に刻まれた過去の風景を美しく、切なく想起させてくれる『イージー・ライダー』だが、こうした美点はこの時代に作られた「アメリカン・ニューシネマ」の多くがそうであるように、青春の美しさだけでなく、若者の“闇”をも鮮やかに切り取っているからこそ生まれたと私は考える。

ニューオリンズの高級娯楽館「青灯亭」で出会った2人の娼婦とワイアット、ビリーがLSDを服用するシーンは、自分の感情を噴出させる事の少ないこの物語に登場する若者たちが、心に抱える闇を表出する数少ない例である。ドラッグによる幻覚の中で、性的な快樂に身を委ねても救われない彼等の苦しみは、このシーンで見せる若者たちのあまりにも悲痛な叫びから観る者へと伝わる。女神像にしがみ付き「ママ、どうして僕を置き去りにしたの？」と泣きじゃくるワイアットの姿は、父ヘンリー・フォンダが別の女性に走った為に母が自殺に至った過去を持つ、生身のピーター・フォンダの心の傷を想起させずにはおかない（撮影現場ではアクターズ・スタジオ流の自分自身の体験を演技として引き出すメソッド・アクティングに基づいて、ホッパーはピーターに過去の経験を台詞として表現するよう要求したという<sup>(5)</sup>）。また、娼婦として生きる2人の女性たちが、どれほどの闇を抱えているか…。彼女たちが露わにした心の傷は、あまりにも痛ましい。自身がドラッグ浸りの生活を送っていたデニス・ホッパーは、ドラッグによる精神の変化を、鬼気迫るほどの演出の冴えで再現している。若者の中にある“性”や“死”といった暗部を、こうした手法で抉り取った作品は珍しいのではないか？

そして、ラストであっけなく最期を遂げる主人公たちの儚さも、この作品の印象をより鮮烈な物にしているだろう。確かに主人公が死を迎える結末は、多くの「アメリカン・ニューシネマ」に共通する要素である。『俺

たちに明日はない』(Bonie and Clyde 1967年)や『明日に向かって撃て!』(Butch Cassidy and Sundance Kid 1967年)、『真夜中のカーボーイ』(Midnight Cowboy 1969年)といったニューシネマを代表する名作でも、主人公たちは悲劇的なラストを迎えている。しかし『イージー・ライダー』ほど呆気なく主人公が命を落とす映画も珍しいのではないだろうか?例えば『俺たちに明日はない』では、ボニーとクライドが機関銃で滅多打ちにされる最期を、観客たちが目を背けたくなる程克明にフィルムに刻み付けている。『明日に向かって撃て!』の主人公である列車強盗のコンビも、軍隊によって包囲されながらも自分たちの意思で積極的な死を迎えているし、『真夜中のカーボーイ』ではダスティン・ホフマン演じる主人公は、親友の傍で安らかな最期を遂げる。これ等の作品のラストは、観客の共感を主人公たちに集め、深い悲しみを与える拔群の効果を持っている。しかし、これ等のシーンはそれまで「アンチ・ヒーロー」として活躍していた主人公たちが一転して、観客の手が届かないスクリーン上の「ヒーロー」へと変容する瞬間とも考えられないだろうか。『イージー・ライダー』はこうした感傷的なラストを排する事で、主人公たちを観客と同じ目線の高さを持つ「アンチ・ヒーロー」として最期を迎えさせる事が出来た稀有なケースだと、私は考える。あまりにも呆気なく銃弾に吹き飛ばされ炎上するワイアットのバイクを、観客はしばし呆然と見詰める。やがて流れ出す『イージー・ライダーのバラード』の旋律を聴きながら、観客の胸には「俺たちは負けたんだ」と呟いたワイアットの悲しい横顔と、にも関わらず美しい思い出として刻まれた旅の風景を思い起こされ、彼等の存在は決して無意味ではないという確信に至るだろう。3人の若者たちの姿は、その死によって観客たちの心に残って行く。まるで、ワイアットとビリーが美しくも悲しい旅の思い出と挫折の中で死んでいったように…。この映画に自分たちの青春を投影した観客たちの人生は続いて行く。その道程では、思い出が薄く消えて行くかもしれないし、より大切な存在として意識されるようになるかもしれない。しかし、ワイアットとビリーの旅に託した自身の青春は、2人の最期によって永遠の物となる。折にふれてこの映画を観返す事で、観客は自分の過去をいつまでも鮮やかに思い起こす事が出来るのだ。さまざまな人々の思い出を包み込めるだけの大きさと、それを綴り込んでくれるアルバムとしての性格があるからこそ『イージー・ライダー』は、これだけ多くの人たちに愛され続けているのではないだろうか?

かつてピーター・フォンダ(1940年生)とデニス・ホッパー(1936年生)、2人の若者がそれぞれに闇を抱えながらも完成させたこの作品は、製作過程のドラマチックな逸話とも相まって映画史に残る名作として語り継がれている。幾度も続編製作が検討されるほどその人気は衰えていないが、この作品に込められたメッセージは現代にこそ必要とされているのかもしれない。多くの若者たちは、この時代の若者同様自分自身の生き方と自由を求め続けている。そうした若者たちを抑え付ける「正義」も、形を変容させながら存在しているだろう。『イージー・ライダー』という「アメリカを探し、どこにも見付けられなかった」男たちの挫折の物語から、私たち現代の若者も建前の「正義」に怯える事なく、それぞれのスタイルで「自由」を捜し求めるための糧を得る必要があると私は思う。ワイアットとビリーが見付ける事の出来なかった「自由」は、まだ私たちも見つけていないはずだ。

註

(1) 『イージー・ライダー』伝説 P240~242

- (2) 『事典 現代のアメリカ』 P862～863
- (3) 『「イージー・ライダー」伝説』P134、153
- (4) 同上P133～134
- (5) 同上P94～96

参考文献

谷川建司

『「イージー・ライダー」伝説 ピーター・フォンダとデニス・ホッパー』  
筑摩書房 1996年

トッド・ギリトン

『60年代アメリカ 希望と怒りの日々』  
彩流社 1993年

小田隆裕ほか編

『事典 現代のアメリカ』  
大修館書店 2004年

鈴木透

『現代アメリカを観る 映画が描く超大国の鼓動』  
丸善株式会社 1999年

ビデオソフト

『イージー・ライダー』

(レポート指導教員 松崎 洋子)